

※ カフィズマは第20の

【 第二の誦文後の坐誦讃詞 第6調 】

誦経) アダムは^{ふとう き み あじわ}不^ふ當^{せつせい}に木^{にが}の果^{くだもの}を味^といて、不^{こうおん}節^{しゆ}制^{なんぢ}の苦^よき果^{しゆさい}を取^しれり、洪^し恩^{さい}なる主^よよ、爾^{なんぢ}は
木^きの上^{うえ}に擧^あげられて、彼^{かれ}を苦^{くる}しき定^{ていざい}罪^{すく}より救^{たま}い給^{ゆえ}えり。故^{われらなんぢ}に我^よ等^{しゆさい}爾^{なんぢ}に呼^よぶ、主^{しゆさい}宰^よよ、
我^{われら}等^{がい}に害^なを爲^みす果^{みづか}を自^{きん}ら禁^{なんぢ}じて、爾^{むね}の旨^{おこな}を行^えうを得^{たま}しめ給^{われら}え、我^{じれん}等^{こうむ}が慈^{こうむ}憐^らを蒙^ら
ん爲^{ため}なり。

こうえい ちち こ せいしん き
光 栄は父と子と聖 神に歸す、

アダムは^{ふとう き み あじわ}不^ふ當^{せつせい}に木^{にが}の果^{くだもの}を味^といて、不^{こうおん}節^{しゆ}制^{なんぢ}の苦^よき果^{しゆさい}を取^しれり、洪^し恩^{さい}なる主^よよ、爾^{なんぢ}は
木^きの上^{うえ}に擧^あげられて、彼^{かれ}を苦^{くる}しき定^{ていざい}罪^{すく}より救^{たま}い給^{ゆえ}えり。故^{われらなんぢ}に我^よ等^{しゆさい}爾^{なんぢ}に呼^よぶ、主^{しゆさい}宰^よよ、
我^{われら}等^{がい}に害^なを爲^みす果^{みづか}を自^{きん}ら禁^{なんぢ}じて、爾^{むね}の旨^{おこな}を行^えうを得^{たま}しめ給^{われら}え、我^{じれん}等^{こうむ}が慈^{こうむ}憐^らを蒙^ら
ん爲^{ため}なり。

いま いつ よよ
今も何時も世世に。アミン。

【 十字架生神女讃詞 】

至^{しじょう}淨^{もの}なる者^{なんぢ}よ、爾^いは潔^{きぎよ}き爾^{なんぢ}の血^ちより身^みを取^とりて、智^{ちえ}慧^こに超^{なんぢ}えて爾^{うま}より生^{しゆ}れし主^{しゆ}
が罪^{ざいはんしゃ}犯^{うち}者^きの中^{かか}に木^みに懸^{こころ}れるを^{いた}見て、心^{はは}を傷^なめ、母^よとして哭^{ああわ}きて呼^こべり、嗚^こ呼^こ吾^こが子^こよ、此^こ
の神^{しんせい}聖^いなる言^{がた}い難^{せつり}き攝^{なん}理^{なんぢ}は何^{これ}ぞや、爾^{もつ}は此^{なんぢ}を以^{ぞうぶつ}て爾^いの造^{たま}物^{われなんぢ}を活^らかし給^らえり。我^ら爾^ら
の慈^{じれん}憐^{かしょう}を歌^ら頌^すす。

しゆあわれ しゆあわれ しゆあわれ
主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光 栄は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

※ 【 第50聖詠 】へ

【 三歌齋經の規程 第三歌頌 】

誦經 句 わ ころ しゅ よ よろこ わ つの わ かみ よ たか わ くち わ てき
我が心は主に縁りて喜び、我が角は我が神に縁りて高くなり、我が口は我が敵の
うえ ひら けだしわれ なんぢ すくい ため たの
上に開けたり、蓋我は爾の救の爲に楽しむ。

句 しゅ ごと せい もの けだしなんぢ ほか た もの わ かみ ごと けんご もの
主の如く聖なる者あらず、蓋爾の外に他の者なし、我が神の如く堅固なる者あ
ず。

句 おご ことば い なか きょうぼう なんぢ くち い なか
驕れる言を言う勿れ、狂妄をして爾の口より出でしむる勿れ、

句 けだししゅ えいち かみ わざ かれ はか
蓋主は睿智の神にして、行爲は彼に權られたり。

句 かれ そのせいしゃ あし まも ふほう もの くらやみ うち き
彼は其聖者の足を守る、不法の者は幽暗の中に消ゆ。

⑥ ぎ しんばんしゃ なんぢ じゅうじか おのれ て の あだ ていざい たま いま きゅう
義なる審判者よ、爾は十字架に己の手を舒べて、仇を定罪し給えり。今は、救

せいしゅ われほうとう なんぢごうにん しゅ かな しょざい ていざい もの すく
世主よ、我放蕩にして爾恒忍なる主を悲しませ、諸罪にて定罪せられし者を救い
たま
給え。

句 けだしひと ちから もつ けんご あら しゅ これ てき もの くだ しゅ せい
蓋人は力を以て堅固なるに非ず、主は之に敵する者を砕かん、主は聖なり。

⑤ しじん きゅうせいしゅ われかちく ごと よく したが どせい のぞ なんぢ いましめ はな
至仁なる救世主よ、我家畜の如き愆に従う度生を望み、爾の誠に離れて、

うと けが じゅうみん どれい いまわれかえ もの い われ すく たま
疎く穢らわしき住民に奴隷とせられたり。今我還る者を納れて、我を救い給え。

句 ちしゃ そのち もつ ほこ なか つよ もの そのちから もつ ほこ なか と もの そのとみ もつ
智者は其智を以て誇る勿れ、強き者は其力を以て誇る勿れ、富む者は其富を以
ほこ なか
て誇る勿れ。

④ ひとりひと あい しゅ むかしみみしい みみ ひら ごと ならわし よ みみしい
イイス、獨人を愛する主よ、昔聾者の耳を啓きし如く、習慣に由りて聾者と

な 爲りたる吾が いたましい みみ ひら い そそ すくい ことば き え たま
靈の耳を啓きて、意を注ぎて救の言を聞くを得しめ給え。

句 ほこ ほつ もの しゅ さと かれ し かつち うち しんばん ぎ おこな もつ ほこ
誇らんと欲する者は主を悟りて彼を知り、且地の中に審判と義とを行を以て誇
るべし。

③ すくい もん かみ わた はし ら てんたつしゃ しじょう ぢよさい どせい
救の門、神に渡る橋、ハリストティアニン等の轉達者、至淨なる女宰よ、度生の

いざない かこ あ われ みちび たま
誘惑に圍まれて荒らさるる我を導き給え。

句 しゅ てん のぼ とどろ かれ ぎ ち はて しんばん
主は天に升起りて轟けり、彼は義にして地の極を審判せん。

② なんぢ おお じれん よ じゅうじか のぼ われ しょよく あな ひ いた
ハリストスよ、爾は多くの慈憐に因りて十字架に升起りて、我を諸愆の坎より引き出

てん のぼ たま
して、天に升せ給えり。

句 かれ ちから もつ そのおう たま そのあぶら もの つの たか
彼は力を以て其王に賜い、其膏つけられし者の角を高くせん。

① なんぢ じゅうじか おのれ て の なんぢ はな しゅうみん いた なんぢ
ハリストスよ、爾は十字架に己の手を舒べて、爾に離れたる衆民を抱きて、爾
けんべい もと た たま
の權柄の下に立たしめ給えり。

こうえい ちち こ せいしん き
光榮は父と子と聖神に歸す、

三者讃詞 さんい ゆいいちしゃ えいざい さんしゃ ゆいいち しんせい ちち こ およ ぎ しん なんぢ
三位の唯一者、永在なる三者、唯一の神性、父、子、及び義なる神よ、爾

とうと もの すく たま
を尊む者を救い給え。

いま いつ よよ
今も何時も世に、アミン。

生神女讃詞 ははどうていぢよ ちじょう もの だれ よろ かな なんぢ さんび え けだし
母童貞女よ、地上の者は誰か宜しきに合いて爾を讚美するを得ん、蓋

なんぢ おんな うち ひとりえら しふく もの あらわ たま
爾は女の中に獨選ばれて、至福なる者と現れ給えり。

われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き
我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

ふじゆん よ なんぢ かな われ たため なんぢ じゅうじか あ わき さ
イイススよ、不順に由りて爾を悲しませし我の爲に爾は十字架に擧げられ、脊を刺
され、膽を嘗め給えり。

しよ ぜ んを こう さく し 、しよ とく を ばい よう
諸 善 耕 作 諸 徳 培 養
する かみ よ 、なんぢ の じれん に よ りて 、
神 爾 慈 憐 因
み を むす ば ざる わ が ち え を み を むす ぶ も の
實 結 我 智 慧 實 結 者
と あらわ した ま え 。
顯 給

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ しゅ いの
我等復又安和にして主に禱らん、



司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) ^{しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ} 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

^{しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら} 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の
^{いのち もつ かみ いたく} 生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) ^{けだしなんぢ われら かみ われら こうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ} 蓋爾は我等の神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世々に、



【 第八歌頌 】

誦經 句 ^{しゅ ことごと ぞうぶつ しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ} 主の悉くの造物は主を崇め讃めよ、彼を歌いて世々に讃め揚げよ。

句 ^{しゅ しよてんし しゅ しよてん しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ} 主の諸天使と主の諸天は主を崇め讃めよ、彼を歌いて世々に讃め揚げよ。

句 ^{しよてん うえ あ みづ しゅ ばんぐん しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ} 諸天の上に在る水と、主の萬軍は主を崇め讃めよ、彼を歌いて世々に讃め揚げよ。

句 ^{ひ つき てん ほし しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ} 日と月と、天の星は主を崇め讃めよ、彼を歌いて世々に讃め揚げよ。

句 ^{てん もろもろ とり やじゆう いつさい かちく しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ} 天の諸の鳥、野獸と一切の家畜は主を崇め讃めよ、彼を歌いて世々に讃め揚げよ。

⑥ ^{じゆうじか なんぢ こうべ ふ あまん ねむ つみ やみ さん ぎ ひかり} 十字架に爾の首を俯して、甘じて眠り、罪の暗を散じたる義の光なるハリスト

^{われほうしん いねむり おのれ ゆだ いつらく よく とこ ふ い もの ねむ め そそ} スよ、我放心の坐睡に己を委ね、逸樂の慾の床に臥して寝ぬる者に眠らざる目を注
^{われ なた たま} ぎて、我を宥め給え。

句 ^{ひと しよし みんな しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ} 人の諸子とイスライリ民は主を崇め讃めよ、彼を歌いて世々に讃め揚げよ。

⑤ ^{われせんれい よ とみ な おんし かざ もの ふとう あくじ まづ この しよ} 我洗禮に由りて富を爲す恩賜に飾られたる者は不當にして惡事の貧しきを好み、諸

とく うと とお あく ち はな もと きゆうせいしゆ かえ われ い なんぢ
徳に疎くなりて、遠く悪の地に離れたり。求む、救世主よ、還して我を納れて、爾

じゅうじか もつ ばんせい まも たま
の十字架を以て萬世に護り給え。

句 しゆ しさい しゆ しょぼく しゆ あが ほ かれ うた よよ ほ あ
主の司祭と主の諸僕は主を崇め讃めよ、彼を歌いて世世に讃め揚げよ。

④ たましい しょよく よい しりぞ ものいみ もつ きよめ な なみだ さけ ころろ たの いて
靈よ、諸慾の酔を退け、齋を以て潔を爲す涙の酒、心を樂しませ、逸
らく か にくよく ほのお け もの え なんぢ ため き うえ てい とも
樂を枯らし、肉慾の燄を滅す者を得よ。爾の爲に木の上に釘せられしハリストスと偕
てい つと しか よよ い
に釘せらるるを務めよ、然らば世世に活きん。

句 しょしん しょせいじん たましい しょぎじん ころろ けんび もの しゆ あが ほ かれ うた
諸神と諸聖人の靈、諸義人と心の謙卑なる者は主を崇め讃めよ、彼を歌いて
よよ ほ あ
世世に讃め揚げよ。

③ じゅんけつ かみ はは わ たましい きずおよ つみ けがれ なんぢ さん わき そそ いづみ
純潔なる神の母よ、吾が靈の傷及び罪の汚を爾の産の脅より注がるる泉
もつ あら そのながれ きよ たま われなんぢ よ なんぢ はし つ なんぢおんちよう こうむ
を以て洗い、其流にて潔め給え、我爾に呼び、爾に趨り付き、爾恩寵を蒙
もの もと
れる者に求むればなり。

句 アナニヤ、アザリヤ、ミサイルは主を崇め讃めよ、彼を歌いて世世に讃め揚げよ。

② み じゅうじか てい しんせい くるしみ う しょうんしおよ われ
身にては十字架に釘せられ、神性にては苦を受けざりしイイススを、諸天使及び我
らち うま もの ばんせい うた
等地に生るる者は萬世に歌う。

句 しゆ しょしと よげんしゃ ちめいしゃ しゆ あが ほ かれ うた よよ ほ あ
主の諸使徒、預言者、致命者は主を崇め讃めよ、彼を歌いて世世に讃め揚げよ。

① なんぢ じゅうじか てい のろい あた は し う われら きゆうかい
ハリストスよ、爾は十字架に釘せられ、詛に當る恥づべき死を受けて、我等を朽壞
のが すく たま
より脱れしめて救い給えり。

われらしゆ ちち こ せいしん あが ほ
我等主なる父と子と聖神とを崇め讃めん。

三者讃詞 ああさんしゃ せい せい せい ゆいいち しんせい むげん たんいつ ばんしゅう ふかしぎ
嗚呼三者、聖、聖、聖なる唯一の神性、無原にして單一なる萬衆の不可思議

かみ われ ごと なんぢ うた
なる神よ、我ヘルヴィムの如く爾を歌う。

いま いつ よよ
今も何時も世世に、アミン。

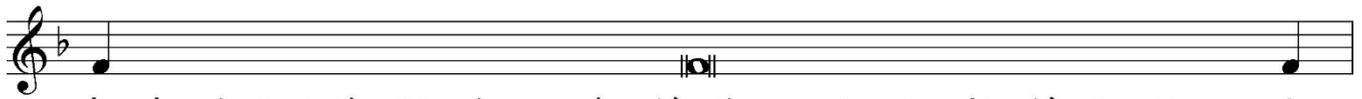
生神女讃詞 いさぎよ もの ばんぞく なんぢ さんび たてまつ よろこ なんぢ とうと けだしなんぢ
潔き者よ、萬族は爾に讚美を奉りて、欣ばしく爾を尊む、蓋爾

ぞうせいしゆ う たま ああおそ きせき しふく さん
は造成主を生み給えり、嗚呼畏るべき奇跡、至福なる産や。

われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き
我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

ハリストスよ、^{なんぢ ひとつ こと ため ことごと くるしみ しの たま こ われ すく ため}爾は一の事の爲に悉くの苦を忍び給えり、是れ我を救わん爲

なり。^{われなんぢ じゅうじか くぎ ほふり ばんせい うた}我爾の十字架と、釘と、屠宰とを萬世に歌う。



われらしゆをほめ、あがめ、ふしおがみて、よ世
我等主 讚 崇 伏 拜



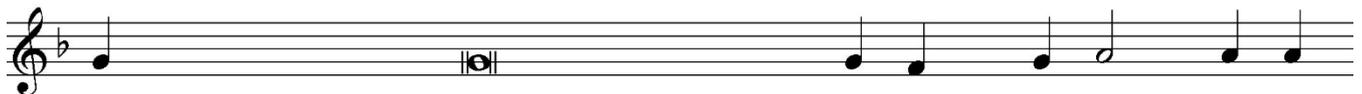
よにうたいほめん。
世 歌 讚



しょてんに おいててんしのこえを もつ
諸天 於 天使 聲 以



てさんえいせらるるかみを、われらち地
讚 榮 神 我 等 地



にうまるるものはあがめほめて、ばんせい いに
生 者 崇 讚 萬 世



うたわん。
歌

司祭) ^{しょうしんぢょ ひかり はは ほめうた もつ ほ あ}生神女、光の母を讚歌を以て讚め揚げん、

※【 我が心は主を崇め 】へ

【 第九歌頌 】

誦經) 句 ^{しゆくさん} 祝 ^{かなしゆ} 讚 ^{かみ} せらるる哉主、^{けだしそのたみ} イズライリの神、^{かえり} 蓋 ^{これ} 其民を ^{あがない} 眷 ^な みて之に ^な 贖 ^な を爲し、

句 ^{われら} 我等の爲に ^{ため} 救 ^{すくい} の角を ^つ 其僕 ^{そのぼく} ダヴィドの家に ^{いえ} 興 ^{おこ} せり、

句 ^{こせい} 古世より ^{そのせい} 其 ^{よげんしゃ} 聖なる ^{くち} 預言者の ^{もつ} 口を ^い 以て ^{ごと} 言いしが ^{ごと} 如し、

句 ^{すなわちわれら} 即 ^わ 我等を ^{しよてきおよ} 我が ^{およ} 諸 ^{われら} 敵 ^{にく} 及び ^{もの} 凡 ^て そ我等を ^{すく} 悪む者の ^{すく} 手より ^{すく} 救い、

句 ^{もつ} 以て ^{あわれみ} 矜 ^わ 恤 ^{せんぞ} を ^{ほどこ} 我が ^{そのせい} 先祖に ^{やく} 施 ^{すなわちわ} し、 ^そ 其 ^{ちか} 聖なる ^{ちかい} 約、 ^{ちか} 即 ^{ちかい} 我が ^{ちかい} 祖 ^{ちかい} アヴラアムに ^{ちかい} 矢 ^{ちかい} いたる ^{ちかい} 誓 ^{ちかい} を

^{きねん}
記念せん、

⑥ ^{ばんゆう} 萬有の ^{おう} 王よ、 ^{なんぢほんせい} 爾 ^{くるしみ} 本性にて ^{あづか} 苦 ^{もの} に ^{あまん} 與 ^{くるしみ} らざる ^う 者が ^{じゆうじか} 甘 ^の じて ^の 苦 ^の を ^の 受け、 ^の 十 ^の 字 ^の 架 ^の に ^の 舒 ^の

^み べられし ^ひ を ^{そのこうせん} 見て、 ^{かく} 日は ^{ぜんち} 其 ^{ふる} 光 ^{うご} 線 ^{ゆえ} を ^{われなんぢ} 隠 ^{いの} し、 ^{いの} 全 ^{いの} 地 ^{いの} は ^{いの} 震 ^{いの} いて ^{いの} 動 ^{いの} けり。 ^{いの} 故 ^{いの} に ^{いの} 我 ^{いの} 爾 ^{いの} に ^{いの} 祈 ^{いの} る、 ^{いの} ハ ^{いの} リ ^{いの} ス

^{いし} ト ^わ スよ、 ^{たましい} 醫師 ^{くるしみ} として、 ^{いや} 我が ^{たま} 靈 ^{たま} の ^{たま} 苦 ^{たま} を ^{たま} 醫 ^{たま} し ^{たま} 給 ^{たま} え。

句 ^い 謂 ^{われら} う、 ^わ 我等 ^{しよてき} に ^て 我が ^{すく} 諸 ^{のち} 敵 ^{おそれ} の ^{かれ} 手 ^{まえ} より ^あ 救 ^{せい} われ ^{もつ} し ^ぎ 後、 ^{せい} 懼 ^{もつ} なく、 ^ぎ 彼 ^ぎ の ^ぎ 前 ^ぎ に ^ぎ 在 ^ぎ りて、 ^ぎ 聖 ^ぎ を ^ぎ 以 ^ぎ て、 ^ぎ 義 ^ぎ

^{もつ} を ^{しょうがい} 以 ^{つか} て、 ^{つか} 生 ^{つか} 涯 ^{つか} 彼 ^{つか} に ^{つか} 事 ^{つか} え ^{つか} し ^{つか} め ^{つか} ん ^{つか} と。

⑤ ^{われすくい} 我 ^{みち} 救 ^す の ^{ちごく} 道 ^{おく} を ^{みち} 棄 ^ゆ てて、 ^{いつらく} 地 ^{ふか} 獄 ^{やみ} に ^{しよよく} 送 ^{こうげき} る ^{いざない} 途 ^{いざない} を ^{いざない} 行 ^{いざない} く、 ^{いざない} 逸 ^{いざない} 樂 ^{いざない} の ^{いざない} 深 ^{いざない} き ^{いざない} 暗 ^{いざない} 、 ^{いざない} 諸 ^{いざない} 慾 ^{いざない} の ^{いざない} 攻 ^{いざない} 撃 ^{いざない} 、 ^{いざない} 誘 ^{いざない} 惑 ^{いざない} の ^{いざない}

^{あらし} 暴 ^{われ} 風 ^{めぐ} は ^{ゆえ} 我 ^{われなんぢ} を ^{いの} 繞 ^{いの} る。 ^{いの} 故 ^{いの} に ^{いの} 我 ^{いの} 爾 ^{いの} に ^{いの} 祈 ^{いの} る、 ^{いの} ハ ^{いの} リ ^{いの} ス ^{いの} ト ^{いの} スよ、 ^{いの} 獨 ^{いの} 大 ^{いの} 仁 ^{いの} 慈 ^{いの} なる ^{いの} 主 ^{いの} として、 ^{いの} 爾 ^{いの} の ^{いの} 十 ^{いの}

^{じか} 字 ^{もつ} 架 ^{われ} を ^{すく} 以 ^{たま} て ^{たま} 我 ^{たま} を ^{たま} 救 ^{たま} い ^{たま} 給 ^{たま} え。

句 ^こ 子 ^{なんぢ} よ、 ^{しじょうしゃ} 爾 ^{よげんしゃ} も ^{とな} 至 ^{けだししゆ} 上 ^{めんぜん} 者 ^ゆ の ^{そのみち} 預 ^{そな} 言 ^{そな} 者 ^{そな} と ^{そな} 稱 ^{そな} え ^{そな} ら ^{そな} れ ^{そな} ん、 ^{そな} 蓋 ^{そな} 主 ^{そな} の ^{そな} 面 ^{そな} 前 ^{そな} に ^{そな} 行 ^{そな} き ^{そな} て ^{そな} 其 ^{そな} 道 ^{そな} を ^{そな} 備 ^{そな} え ^{そな} ん。

④ ^{われいざない} 我 ^{あらし} 誘 ^{かこ} 惑 ^{しよよく} の ^{あらなみ} 暴 ^{おぼ} 風 ^{いつらく} に ^{ぐふう} 圍 ^{はげ} ま ^う れ、 ^{もの} 諸 ^{もの} 慾 ^{もの} の ^{もの} 激 ^{もの} 浪 ^{もの} に ^{もの} 溺 ^{もの} ら ^{もの} さ ^{もの} れ、 ^{もの} 逸 ^{もの} 樂 ^{もの} の ^{もの} 颯 ^{もの} 風 ^{もの} に ^{もの} 劇 ^{もの} しく ^{もの} 打 ^{もの} た ^{もの} る ^{もの} る ^{もの} 者 ^{もの}

^{ものいみ} は ^{おだやか} 齋 ^{しづか} の ^{うみ} 穩 ^{いた} に ^{こうおん} して ^{しゆ} 静 ^{なんぢ} なる ^{じゆうじか} 海 ^{もつ} に ^{われ} 至 ^{われ} れ ^{われ} り。 ^{われ} 洪 ^{われ} 恩 ^{われ} なる ^{われ} 主 ^{われ} よ、 ^{われ} 爾 ^{われ} の ^{われ} 十 ^{われ} 字 ^{われ} 架 ^{われ} を ^{われ} 以 ^{われ} て ^{われ} 我 ^{われ} を

^{そのうち} 其 ^{みちび} 中 ^{すくい} に ^{むか} 導 ^{たま} き ^{たま} て、 ^{たま} 救 ^{たま} に ^{たま} 向 ^{たま} わ ^{たま} し ^{たま} め ^{たま} 給 ^{たま} え。

句 ^{かれ} 彼 ^{たみ} の ^{そのすくい} 民 ^{すなわちしよざい} に、 ^{ゆるし} 其 ^わ 救 ^{かみ} は ^{あわれみ} 即 ^よ 諸 ^し 罪 ^し の ^し 赦 ^し に ^し して、 ^し 我 ^し が ^し 神 ^し の ^し 矜 ^し 恤 ^し に ^し 因 ^し る ^し こと ^し を ^し 知 ^し ら ^し し ^し め ^し ん。

③ ^{どうていぢよ} 童 ^{なんぢ} 貞 ^{たね} 女 ^{にくたい} よ、 ^{のぞみ} 爾 ^{ばんゆう} は ^{つく} 種 ^{かみ} なく、 ^{ことば} 肉 ^{はら} 體 ^{どう} の ^{どう} 望 ^{どう} なく ^{どう} して、 ^{どう} 萬 ^{どう} 有 ^{どう} を ^{どう} 造 ^{どう} り ^{どう} し ^{どう} 神 ^{どう} の ^{どう} 言 ^{どう} を ^{どう} 孕 ^{どう} み、 ^{どう} 童 ^{どう}

^{てい} 貞 ^{うしな} を ^{はは} 失 ^{さんく} わ ^し ず、 ^う 母 ^{たま} の ^{ゆえ} 産 ^{われらした} 苦 ^{ころ} を ^{もつ} 知 ^{なんぢ} ら ^{しょう} ず ^{しょう} して ^{しょう} 生 ^{しょう} み ^{しょう} 給 ^{しょう} え ^{しょう} り。 ^{しょう} 故 ^{しょう} に ^{しょう} 我 ^{しょう} 等 ^{しょう} 舌 ^{しょう} と ^{しょう} 心 ^{しょう} と ^{しょう} を ^{しょう} 以 ^{しょう} て ^{しょう} 爾 ^{しょう} を ^{しょう} 生 ^{しょう}

^{しんぢよ} 神 ^う 女 ^{みと} と ^{あが} 承 ^ほ け ^ほ 認 ^ほ め ^ほ て、 ^ほ 崇 ^ほ め ^ほ 讚 ^ほ む。

句 ^こ 此 ^{あわれみ} の ^よ 矜 ^{あさひ} 恤 ^{うえ} に ^{われら} 因 ^{のぞ} りて、 ^{のぞ} 東 ^{のぞ} 旭 ^{のぞ} は ^{のぞ} 上 ^{のぞ} より ^{のぞ} 我 ^{のぞ} 等 ^{のぞ} に ^{のぞ} 臨 ^{のぞ} め ^{のぞ} り、

② わ きゆうせいしゅ なんぢ あまん じゅうじか てい しの たま しゅうじん し
我が救世主よ、爾は甘じて十字架に釘せらるるを忍び給えり、衆人を死より
すく 救いて、之に生命を賜わん爲なり。

句 くらやみ し かげ ざ もの てら われら あし へいあん みち むか ため
幽暗と死の蔭とに坐する者を照し、我等の足を平安の道に向わしめん爲なり。

① われ き よ ころ じゅうじか き よ い けだしわ これ てい
我は木に縁りて殺され、十字架の木に縁りて活かされたり、蓋吾がハリストスは之に釘
せられて、我が敵を殺し給えり。

こうえい ちち こ せいしん き
光榮は父と子と聖神に歸す、

三者讃詞 われらちち とも あ こ およ かれら わか せいしん いちい ふくはい
我等父と偕に在る子、及び彼等と分れざる聖神に一意に伏拜す。

いま いつ よよ
今も何時も世世に、アミン。

生神女讃詞 しえい きせき おどろ きこえ いさぎよ もの いかん なんぢ どうていぢょ う
至榮なる奇跡、驚くべき聲聞や、潔き者よ、如何ぞ爾は童貞女として生み、
はは 母として童貞を守りたる。

われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き
我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

かみ われなんぢ ほこうた なんぢ くぎ かいじゅう あし じゅうじか かしょう
イイスス神よ、我爾の戈を歌い、爾の釘、海絨と、葦と、十字架とを歌頌す、

けだしなんぢ これら もつ われ すく たま
蓋爾は此等を以て我を救い給えり。

むてんなるしょうしんぢよよ、われらはしんせい
無玷生神女我等神聖
なるひにやかれざりしなんぢのどうてい
火焚爾童貞
をあげほむ。
崇讃

※ 【 常に福にして 】へ

【 挿句讃詞 】

誦經 わ たましい なんぢ しょとく たか す つみ ふかみ くだ きょうあく とうぞく あ
我が 靈 よ、爾 は諸 徳の 高きを棄てて、罪の深處に下り、兇 惡なる盜 賊に遇いて、
あくしゅう きず おお たお ふじょ ふ ゆえ なんぢ ため じゅうじか くぎ
惡 臭 の傷に蔽はれ、倒されて、扶助なくして臥す。故に 爾 の爲に 十 字架に釘せられ
あまん きず う かみ よ しゅ われ ため おもんばか われ すく たま
て、甘 じて傷を受けしハリストス神に呼べ、主よ、我の爲に 慮 りて、我を救い給え。

句 しゅ つと なんぢ あわれ もつ われら あ しか われらしょうがいよろこ たのし
主よ、夙に爾 の 憐 みを以て我等に飽かしめよ、然せば我等生 涯 歡 び 樂 まん。
なんぢわれら う ひ われら わざわい あ とし か われら たのし たま ねが
爾 我等を撲ちし日、我等が 禍 に遭いし年に代えて、我等を 樂 ましめ給え。願わくは
なんぢ わざ なんぢ しょぼく あらわ なんぢ こうえい その しょし あらわ
爾 の工作は 爾 の諸 僕に 著 れ、 爾 の光 榮は其の諸 子に 著 れん。

讃詞 しゅ われふとう もの とうぞく おもい きず し よげんしゃ かい
主よ、我 不當の者は盜 賊の 思 に傷つけられて、死するばかりになれり、預 言 者の會
わ し ひと じゅつ もつ いや み さ ゆえ われいた や
は我が死するばかりになりて、人 の 術 を以て醫 されぬを見て去れり。故に我 痛 く病みて、
けんび こころ もつ なんぢ よ かみ じれん しゅ なんぢ おおい あわれみ
謙卑の 心 を以て 爾 に呼ぶ、ハリストス神よ、慈 憐の主として、 爾 の大 なる 憐 を
われ そそ たま
我に注ぎ給え。

句 ねが しゅわ かみ めぐみ われら あ ねが わ て わざ われら たす たま わ
願わくは主 吾が神の 惠 は我等に在らん、願わくは我が手の工作进行を我等に助け給え、我
て わざ たす たま
が手の工作进行を助け給え。

致命者讃詞 か ちめいしゃ なんぢら くる もの おどし おそ くるしみ
勝たれぬハリストスの致命者よ、 爾 等は苦しむる者の恐 嚇を畏れずして、 苦
もつ たのしみ な じゅうじか ちから もつ まよい か えいえん いのち おんちよう う
を以て 樂 と爲し、十 字架の 力 を以て 迷 に勝ちて、永 遠の生命の恩 寵 を受たり。
いまなんぢら ち われら たましい ため いやし な われら たましい すく いの たま
今 爾 等の血は我等の 靈 の爲に醫 治と爲れり。我等の 靈 の救われんことを祈り給
え。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光 榮は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世に、アミン。

十字架生神女讃詞 ことば じゅんけつ もの なんぢ み き うえ かか み こころさ な
言よ、純 潔なる者は 爾 が身にて木の上に懸れるを見て、心 刺され、泣
よ わ しあい わ こおよ しゅ なんぢいつこ ゆ われ
きて呼べり、我が至 愛なるイイスス、吾が子及び主よ、 爾 何處にか往く、ハリストスよ、我
なんぢ う もの ひとりのこ なか
爾 を生みし者を 獨 遺す勿れ。

※ 「至上者よ、主を讃榮し、爾の名に歌い、…」へ

※カフィズマの変更 (いづれも、通常省略)

一時課に第三カフィズマ

三時課に第四カフィズマ

六時課に第五カフィズマ

六時課の変更部分

【 預言の讃詞 第1調 】

誦經) ^{しゅ なんぢ ため くるしみ う しよせいじん くなん よ われら もろもろ やまい いや たま}
主よ、爾の爲に苦を受けし諸聖人の苦難に因りて、我等の諸の病を醫し給
^{ひと あい しゅ なんぢ いの}
え。人を愛する主よ、爾に祈る。

【 提綱 第91聖詠 第4調 】

司祭) ^{つつし き}
謹みて聽くべし。

誦經) ^{プロキメン だいし しらべ しじょうしゃ しゅ さんえい なんぢ な うた び かな}
提綱、第四の調、至上者よ、主を讃榮し、爾の名に歌うは美なる哉。

しじょうしゃよ、しゅをさんえいし、なんぢのな
至上者主讃榮 爾名
にうたうはびなるかな。
歌 美

誦經) ^{なんぢ あわれみ あさの なんぢ まこと よの び かな}
爾の憐を朝に宣べ、爾の眞を夜に宣ぶるは美なる哉。

しじょうしゃよ、しゅをさんえいし、なんぢのな
至上者主讃榮 爾名
にうたうはびなるかな。
歌 美

誦經) ^{しじょうしゃ しゅ さんえい}
至上者よ、主を讃榮し、



【 イサイヤの預言書 41章4-14節 】

司祭) えいち 睿智、

誦経) いさいやのよげんしよのよみ、

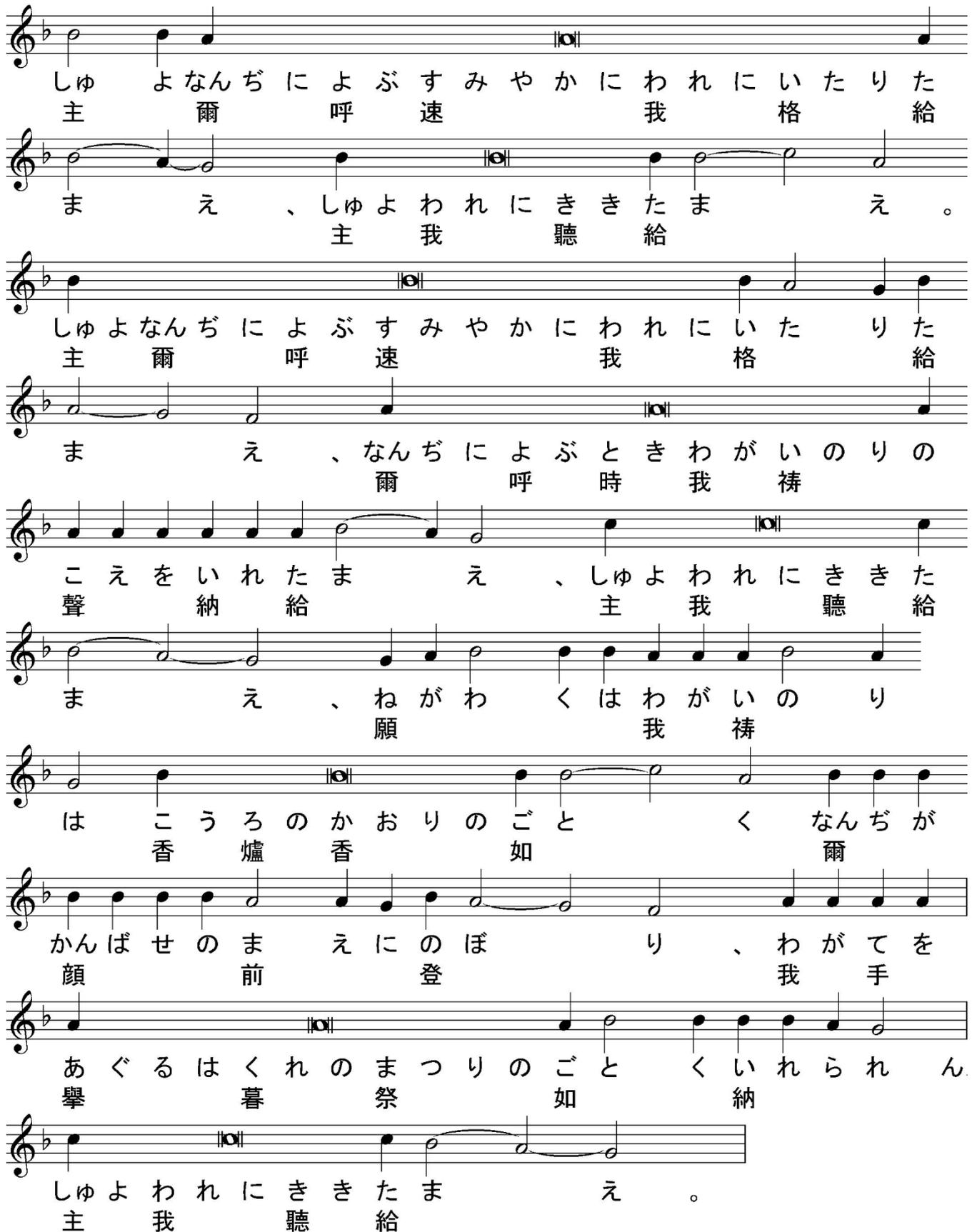
司祭) つつし き 謹みて聴くべし。

誦経) しゆか ごと い われ はじめ しゆ おわり われどういつ しゆ しまじま み おそ
 主是くの如く言う、我は始の主なり、終にも我同一の主なり。州島は見て懼れ、
 ち はて おのの かれら ちか あつ おのおのそのとなり たす そのけいてい い いさ
 地の極は懼けり。彼等は近づきて集まり、各其隣を助け、其兄弟に謂う、勇め
 ちようこくし かなざいくにん はげ つち もつ たいら もの かなしき う もの はげ
 よ、彫刻師は金工を勵まし、鎚を以て平ぐる者は鐵礎を打つ者を勵まして、
 ろうづけ こと い こ よ かつくぎ もつ かた うご しか なんぢ
 鐵著の事を言う、此れ善しと、且釘を以て堅くして、動くことなからしむ。然れども爾
 わ ぼく わ えら わ とも すえ なんぢわ ち はて
 我が僕イスライリ、我が選びたるイアコフ、我が友たるアヴラアムの裔よ、爾我が地の極よ
 と そのはし め なんぢ われ ぼく われなんぢ えら なんぢ す い もの
 り執り、其端より召して、爾は我の僕、我爾を選べり、爾を棄てざらんと言われし者
 おそ なか けだしわれなんぢ とも おどろ なか けだしわれ なんぢ かみ われなんぢ
 よ、懼れる母れ、蓋我爾と偕にす、驚く母れ、蓋我は爾の神なり、我爾を
 かた なんぢ たす わ ぎ みぎ て もつ なんぢ ささ み なんぢ むか いか もの みな
 堅め、爾を助け、我が義の右の手を以て爾を支えん。視よ、爾に向いて怒る者は皆
 はぢ え はづかしめ こうむ なんぢ あらそ もの な ごと ほろ なんぢかれら たづ
 恥を得、辱を蒙り、爾と争う者は無きが如くなりて亡びん。爾彼等を尋ぬと
 かれらすなわちなんぢ あだ もの あ なんぢ たたか もの な ごと まつた な
 も、彼等即爾に仇する者に遇わざらん、爾と戦う者は無きが如く、全く無きが
 ごと けだしわれしゆなんぢ かみ なんぢ みぎ て と なんぢ い おそ なか われなんぢ
 如くならん、蓋我主爾の神は爾の右の手を執りて爾に謂う、懼るる母れ、我爾
 たす むし ひとすくな おそ なか われなんぢ たす しゆなんぢ
 を助く。蟲なるイアコフ、人少きイスライリよ、懼るる母れ、我爾を助く、主爾の
 しよくざいしゃ せい ものこれ い
 贖罪者、イスライリの聖なる者之を言う。

※ 「主よ、願わくは爾の慈憐は速に我等を迎えん、、、」へ

※ カフィズマは第七カフィズマを誦する

【 第140聖詠 第8調 】



しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給
主 爾 呼 速 我 格 給

まえ、しゅよわれにききたまえ。
主 我 聽 給

しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給
主 爾 呼 速 我 格 給

まえ、なんぢによぶときわがいのりの
主 爾 呼 時 我 祈

こえをいれたまえ、しゅよわれにききた給
聲 納 給 主 我 聽 給

まえ、ねがわくはわがいのり
願 我 祈

はこうろのかおりのごとくなんぢが
香 爐 の 香 如 爾

かんばせのまえにのぼり、わがてを
顔 前 登 我 手

あぐるはくれのまつりのごとくいれられん
舉 暮 祭 如 納

しゅよわれにききたまえ。
主 我 聽 給

誦經) しゅ わくち まもり お わくちびる もん ふせ たま わ ころ よこしま ことば かたぶ
主よ、我が口に衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給え、我が心に邪なる言に傾

きて、不法を行 う人と共に、罪の推 諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の甘味を嘗め
ざらん。義人は我を罰すべし、是れ矜 恤なり、我を譴むべし、是れ極と美 しき膏、我
が首を悩ます能わざる者なり、唯我が 禱は彼等の悪事に敵す。彼等の首 長は巖石
の間 に散じ、我が言の柔 和なるを聴く。我等を土の如く斫り碎き、我が骨は地獄の
口 に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾を恃む、我が 霊を退く
る母れ。我が爲に設けられし 罟、不法者の網より我を護り給え。

句 不虔者は己の網に罹り、唯我は過ぐるを得ん。

我不當の者は我が思を以て盜賊に遇い、智慧を擄にせられて、甚しく傷つけられ、
霊 全 くに病み、諸徳を剥がれて生命の途に臥す。司祭は我が傷に惱みて醫されぬを見
て、我を顧みざりき、レヴィトも亦 霊を害する病に忍びず、我を見て過ぎ去れり。
爾ハリストス神、サマリアよりするにあらずして、マリヤより身を取ることを嘉せし主よ、
爾の仁愛を以て我に醫治を施して、爾の大なる 憐を我に沃ぎ給え。

句 我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、

我不當の者は我が思を以て盜賊に遇い、智慧を擄にせられて、甚しく傷つけられ、
霊 全 くに病み、諸徳を剥がれて生命の途に臥す。司祭は我が傷に惱みて醫されぬを見
て、我を顧みざりき、レヴィトも亦 霊を害する病に忍びず、我を見て過ぎ去れり。
爾ハリストス神、サマリアよりするにあらずして、マリヤより身を取ることを嘉せし主よ、
爾の仁愛を以て我に醫治を施して、爾の大なる 憐を我に沃ぎ給え。

句 我が禱を其前に注ぎ、我が憂を其前に顯せり。

致命者讚詞 如何なる徳、如何なる 譽も、之を聖者に歸すべし。蓋彼等は爾天を傾けて
降りし者の爲に己の首を劍の下に傾け、爾己を罄して僕の形を受けし者の
爲に其血を流し、爾の謙遜に效いて、死に至るまで降りり。神よ、彼等の祈禱に因
りて、爾が恵の多きを以て我等を 憐み給え。

句 我が霊の衷に弱りし時、爾は私の途を知れり、

しゅ なんぢ おのれ せい もんと れいち てん あらわ たま かれら せい てん
主よ、爾は己の聖なる門徒を靈智なる天と顯し給えり。彼等の聖にせられし轉

たつ よ われ ち しょあく のが せつせい よ つね わ りょうしん おもい なんぢ
達に由りて、我を地の諸惡より脱れしめ、節制に由りて常に我が良心の思を爾の

くるしみ のぼ たま なんぢ こうおん ひと あい しゅ
苦に上せ給え、爾は洪恩にして人を愛する主なればなり。

句 わ ゆ みち おい かれら ひそか わ ため あみ もう
我が行く路に於て、彼等は竊に我が爲に網を設けたり。

われらみなものいみ とき しんせい おこない たす もの たも ぜんしん もつ な きゅうせい
我等皆齋の時を神聖なる行を助くる者と有ちて、全心を以て泣きて救世

しゅ よ だいじんじ しゅ なんぢ もんと よ あい もつ なんぢ うた もの すく たま
主に呼ばん、大仁慈なる主よ、爾の門徒に由りて、愛を以て爾を歌う者を救い給え、

なんぢ こうおん ひと あい しゅ
爾は洪恩にして人を愛する主なればなり。

句 われみぎ め そそ ひとり われ みと もの
我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、

いた さんび しと せかい きとうしゃ や もの いし そうけん しゅごしゃ われらものいみ
至りて讚美たる使徒、世界の祈禱者、病める者の醫師、壯健の守護者よ、我等齋

とき す もの なん ほう もつ まも たま われらみなたがい しんせい わへい たも しよ
の時を過ぐる者を何の法を以ても護り給え、我等皆互に神聖なる和平を保ち、諸

よく ちえ みだ まも ふくかつ しょうりしゃ うた あが ほめ ため
慾に智慧を擾さるるなく守りて、復活せしハリストスを勝利者と歌いて、崇め讚めん爲

なり。

句 われ のが ところ わ たましい かえりみ もの
我に遁るる所なく、我が靈を顧る者なし。

われわ いつしょう いんぶおよ ぜいり とも ついや わ おか しょざい ため としお およ
我吾が一生を淫婦及び税吏と偕に費せり、我が犯しし諸罪の爲に年老ゆるに及

びても猶痛悔するを得んか。萬有の造成主、病む者の醫師たる主よ、我が終まで亡び

ざる先に我を救い給え。

句 しゅ われなんぢ よ い なんぢ われ かくれが い もの ち おい われ ぶん
主よ、我爾に呼びて云えり、爾は私の避所なり、生ける者の地に於いて私の分なり。

われ はなはだ おこたり ふけ ひぢ ふ や い われ うち かみ ぞう
我は甚しき怠惰に耽り、泥に伏し、ヴェリアルの矢に射られ、私の内にある神の像

したが つく もの けが たいまんしゃ おこ つみ おか もの たす しゅ
に循いて造られし者を汚す。怠慢者を起し、罪を犯しし者を援くる主よ、我が終ま
で亡びざる先に我を救い給え。

句 わ よ き たま われはなはだよわ
我が呼ぶを聴き給え、我甚弱りたればなり、

われちじょう もの ち こと こうさく ひとひと つまづき な なんぢ めい よ
我地上の者として地の事をのみ耕作して、人人の蹟と爲れり、爾の命に由りて

こんぱい な つみ もつ わ とこ けが つち われ つく もの なんぢ ぞうぶつ
婚配を爲したれども、罪を以て吾が榻を汚せり。土より我を造りし者よ、爾の造物

す なか
を棄つる勿れ。主よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ
我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強ければなり。

われ わ にくたい こと おもんばか わ たましい ころ もの な いつらく もろもろ ふとう
我は吾が肉體の事を慮りて、吾が靈を殺す者と爲れり、逸樂と諸の不當

なる事とに役して、悪鬼の嘲弄と立てられたり。悪鬼を逐う者よ、爾の慈憐を以て我

を宥め給え。主よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 わ たましい ひとや ひ いだ われ なんぢ な さんえい たま
我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讚榮せしめ給え。

われ ほしいまま しゅう こ つみ おか ゆえ す われ にくたい おもい わ たましい
我、縦に衆に超えて罪を犯せり、故に棄てられたり、我は肉體の思を吾が靈

に敵する者として有つ、此れ我を昏ます。幽暗に居る者の光、迷う者の嚮導師たる

主よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 なんぢおん われ たま とき ぎじん われ めぐ
爾恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。

よげんしゃ い しゅ わ たましい い なんぢ ほ あ われまよ ひつじ たづ
預言者は言えり、主よ、吾が靈は生きて、爾を讃め揚げん、我迷いし羊を尋ねて、

爾の牧群に合せ給え。我に痛悔の時を與えよ、我が歎息して爾に呼ばん爲なり、

主よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 しゅ われふか ところ なんぢ よ しゅ わ こえ き たま
主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給え、

ハリストス神よ、我爾の命に背きて罪を犯し、罪を犯せり。恩主よ、我に慈憐を垂

れ給え、我が内心の眼を開き、幽暗を逃れて、畏を以て呼ばん爲なり、主よ、我が終

まで亡びざる先に我を救い給え。

句 ねが なんぢ みみ わ いのり こえ き い
願わくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

やじゅう われ かこ しゅさい これら われ のが たま けだしなんぢ しゅうじん すくい
野獸は我を圍めり、主宰よ、此等より我を脱れしめ給え。蓋爾は衆人が救

を得、及び眞實を知るに至らんことを欲す、造成主として衆人と共に我をも救い給

え。主よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと
主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の

爾の前に敬まん爲なり。

おんしゅ わ ため いやし な たま わ しよくざいしゅおよ きゅうしゅ われ しりぞ なか
恩主よ、我が爲に醫治と爲り給え、我が贖罪主及び救主よ、我を退くる母れ。

わ ふほう うち ふ み ぜんのうちや われ おこ たま われ わ うた たてまつ なんぢ
我が不法の中に臥すを見て、全能者として我を起し給え、我も我が歌を奉りて爾

よ ため しゅ わ おわり ほろ さき われ すく たま
に呼ばん爲なり、主よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの
我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

われむち ぼく われ あた かく ち うづ ゆえ ふとう
我無知の僕として、我に與えられたるタラントを藏して、地に埋めたり、故に不當なる
もの ていざい これ あえ なんぢ もと え あく おも しゅ われ なた
者として定罪せられて、是より敢て爾に求むるを得ず。惡を懷わざる主として我を宥
たま われ よ ため しゅ わ おわり ほろ さき われ すく たま
め給え、我も呼ばん爲なり、主よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 わ たましいしゅ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ
我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

けつろう うれ おんな なんぢ すそ さわ もつ くるしみ いけ か しゅ われうたがい
血漏を患うる婦の爾の裾に捫るを以て苦の池を涸らしし主よ、我疑なき
しん もつ なんぢ はし つ もの しょざい ゆるし あた か おんな ごと われ い わ やまい
信を以て爾に趨り附く者に諸罪の赦を與え、夫の婦の如く我を納れて、吾が病
いや たま しゅ わ おわり ほろ さき われ すく たま
を醫し給え。主よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 ねが しゅ たの けだしあわれみ しゅ おおい あがない かれ かれ
願わくはイスライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼

はそのことごと ふほう あがな
はイスライリを其悉くの不法より贖わん。

ことば もつ てんち つく しゅ なんぢほうざ ざ われらみなまえ た なんぢ わ しょ
言を以て天地を造りし主よ、爾寶座に坐せんに、我等皆前に立ちて、爾に我が諸
ざい つ か ひ まえ われ つうかい もの い たま しゅ わ おわり ほろ
罪を告げん、彼の日の前に我を痛悔する者として納れ給え。主よ、我が終まで亡びざる
さき われ すく たま
先に我を救い給え。

句 ばんみん しゅ ほ あ ばんぞく かれ あが ほ
萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ、

ゆいいち きゅうせいしゅ じれん め もつ かえり われ じんじ た わ まづ ふとう
惟一の救世主よ、慈憐の眼を以て顧みて、我に仁慈を垂れ、我が貧しき不當なる
たましい いやし ながれ たま これ わ しわざ けがれ あら たま わ うた ため しゅ
靈に醫治の流を賜いて、之を我が行爲の汚より洗い給え、我が歌わん爲なり、主
わ おわり ほろ さき われ すく たま
よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゅ しんじつ なが そんな
蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

こうおん しゅ わ ひび たましい とら はか つるぎ そな われ
洪恩なる主よ、ヴェリアルは我が卑微なる靈を執えんと謀りて、劍を備え、我を
なんぢ かんばせ し ちしき こうしょう うと もの な のうりよく けんご もの われ そのうつわ
爾の顔を知る知識の光照に疎き者と爲せり。能力の堅固なる者よ、我を其器
うち うば たま しゅ わ おわり ほろ さき われ すく たま
の中より奪い給え。主よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 てん おもの われめ あ なんぢ のぞ み ぼく めしゅじん て のぞ ひ めしゅふ
天に居る者よ、我目を擧げて爾を望む。視よ、僕が目主人の手を望み、婢の目主婦の

て のぞ ごと われら め しゅわ かみ のぞ そのわれら あわれ ま
手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を憐むを俟つ。

われ りつぼう しんせい しょ す まつた しょよく ふくえき われ ため われ に もの
我は律法と神聖なる書とを遺て、全く諸愆に服役せり。我の爲に我に肖たる者

な しぜん おんしゅ われ まつた いや たま しょよく ほろぼ こうおん もの われ はん
と爲りし至善なる恩主よ、我を全く醫し給え、諸愆を滅す洪恩なる者よ、我を反

せい たま しゅ わ おわり ほろ さき われ すく たま
正せしめ給え。主よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 しゅ われら あわれ われら あわれ たま けだしわれら あなどり あ た われら たましい
主よ、我等を憐み、我等を憐み給え、蓋我等は悔に贖き足れり。我等の靈

おご もの はづかしめ ほこ もの あなどり あ た
は驕る者の辱と誇る者の悔とに贖き足れり。

いんぱ なみだ もつ なんぢ しじょうしそん あし うるお しゅう はし つ おのれ しょざい
淫婦は涙を以て爾の至淨至尊なる足を濕して、衆に、趨り附きて己の諸罪

ゆるし う すす きゅうせいしゅ われ かれ しん あた たま わ よ ため
の赦を受けんことを勧む。救世主よ、我にも彼の信を與え給え、我が呼ばん爲なり、

しゅ わ おわり ほろ さき われ すく たま
主よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き
我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

わ ため へりくだ にくたい もつ おさなご な しゅ われよわ ふとう もの なんぢ じん
我が爲に謙りて、肉體を以て嬰兒と爲りし主よ、我弱りたる不當の者に爾の仁

じ いつてき くだ わ たましい けがれ きよ たま われや もの けがれ あら
慈の一滴を降して、我が靈の汚を潔め給え。ハリストスよ、我病める者を汚より滌

いや たま しゅ わ おわり ほろ さき われ すく たま
いて醫し給え。主よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き
我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

しゅさい なんぢ はし つ つね なんぢ つと ため わ たましい かた たま けだしなんぢ われ
主宰よ、爾に趨り附きて常に爾に勤めん爲に吾が靈を堅め給え、蓋爾は我

おおい まもり かくれが およ たすけ かみ ことば われ いき なんぢ よ え
の帡幪と、守護と、避所、及び扶助なり。神の言よ、我に勇ましく爾に呼ぶを得しめ

たま しゅ わ おわり ほろ さき われ すく たま
給え、主よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き
我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

きゅうせいしゅおよ じんじ かみ われら ため やぶ かき な たま けだしわれら
イイス 救世主及び仁慈なる神よ、我等の爲に壞られぬ牆と爲り給え、蓋我等は

いざな ならわし おこない もつ だらく もと おんしゅ なんぢ ぞうぶつ おこ こうおん
誘われて風習と行とを以て墮落せり。求む、恩主として爾の造物を起し、洪恩

しゅ われら やわ たま しゅ わ おわり ほろ さき われ すく たま
なる主として我等と和らぎ給え。主よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き
我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

われ とみ ついや どうし な いまうえ くる なんぢ おおい した はし つ じんじ
我は富を費しし蕩子と爲りて、今饑に苦しみて、爾の庇廕の下に趨り附く。仁慈

ちち か どうし ごと われ い えん あづか え たま わ なんぢ よ ため
なる父よ、彼の蕩子の如く我を納れて、筵に與るを得しめ給え、我が爾に呼ばん爲な

しゅ わ おわり ほろ さき われ すく たま
り、主よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き
我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

あく かしら そねみ よ はじ つく もの らくえん うば き かか とうぞく われ
惡の魁は猜忌に因りて始めて造られし者より樂園を奪えり、木に懸れる盜賊は、我
おも たま い らくえん え われ しん おそれ もつ われ おも たま なんぢ よ
を憶い給えと言いて、樂園を得たり。我も信と畏とを以て我を憶い給えと爾に呼ぶ。

しゅ わ おわり ほろ さき われ すく たま
主よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き
我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

かみ お ごと われ て の ふかみ ひ あ たね なんぢ う じゅん
神よ、ペトルに於けるが如く、我に手を舒べて、深處より引き上げ、種なく爾を生みし純
けつ ははおよ なんぢ しゅうせいじん きとう よ われ おんちよう じれん あた たま しゅ
潔なる母及び爾の衆聖人の祈禱に由りて、我に恩寵と慈憐とを與え給え。主よ、

わ おわり ほろ さき われ すく たま
我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

句 われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き
我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

われ つみ にな こひつじ われひび なんぢ うた もの い たま われたましい からだ まつた
私の罪を任いし 羔よ、我日に爾を歌う者を納れ給え。我靈と體とを全
なんぢ て わた よる ひる よろ かな なんぢ よ しゅ わ おわり ほろ
く爾の手に付して、夜に晝に宜しきに合いて爾に呼ぶ、主よ、我が終まで亡びざる
さき われ すく たま
先に我を救い給え。

こうえい ちち こ せいしん き
光榮は父と子と聖神に歸す、

ああしじん ごうにん しゅ なんぢ じれん の がた ああむく こうおん しゅ われ
嗚呼至仁にして恒忍なる主よ、爾の慈憐は宣べ難し。嗚呼無垢なる洪恩の主よ、我
なんぢ かんばせ しりぞ なか われ かんしゃ こころ いた よろこ かつうた なんぢ よ
を爾の顔より斥くる勿れ、我も感謝の心を抱きて、喜び且歌いて爾に呼ば
ため しゅ わ おわり ほろ さき われ すく たま
ん爲なり、主よ、我が終まで亡びざる先に我を救い給え。

【 生神女讚詞 第4調 】

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
今 何 時 世 世

あ あ い い が た き か ん よ う や 、 あ あ お ど ろ く
嗚 呼 言 難 寛 容 嗚 呼 驚

べ き い た り て き い な る さ ん や 、 あ あ い か
至 奇 異 産 嗚 呼 如 何

にしてど う て い ぢよ は なんぢ ぞ う ぶ つ しゅ お よ
 童 貞 女 爾 造 物 主 及
 び か み を お さ な ご と して お の れ の て
 神 嬰 児 己 手
 に い だ く 。 か れ よ り あ ま ん じ て み を と り た 給
 抱 彼 甘 身 取 給
 ま い し お ん しゅ よ 、 わ が お わ り ま で ほ ろ び ざ
 恩 主 我 終 亡 び ざ
 る さ き に わ れ を す く い た ま
 先 我 救 給
 え 。

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つつし} 肅 ^た みて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 】

せ い に し て ふ く た る じょう せ い な る て ん の ち ち の
 聖 福 常 生 天 父 の
 せ い な る こう え い の お だ や か な る ひ か り イ イ
 聖 光 榮 穩 光
 ス スハリスト スよ 、 わ れ ら ひ の い り に い た り く
 我 等 日 入 至 暮
 れ の ひ か り を み て 、 か み ち ち と こ と せ い し ん
 光 見 神 父 子 聖 神
 を う た う。 い の ち を た も う か み の こ
 歌 生 命 賜 う 神 子

よ、なんぢはいつもけいけんのこえにてうたわ
 爾 何時 敬 虔 聲 歌
 るべし、ゆえにせかいはなんぢをあがめ
 故 世界 爾 崇
 ほむ。

【 第一の提綱 ^{プロキメン} 】

司祭) ^{つつし} 謹みて聴くべし、^{しゅうじん} 衆人に平安、^{えいち} 睿智、^{つつし} 謹みて聴くべし。

誦經) ^{だいし} プロキメン、^{しらべ} 第四の調、^{あだ} 仇を報ゆる神よ、^{かみ} 主、^{しゅ} 仇を報ゆる神よ、^{あだ} 己を顯し給え。

あだをむくゆるかみよ、しゅあだをむくゆる
 仇 報 神 主 仇 報
 かみよ、おのれをあらわしたまえ。
 神 己 顯 給

誦經) ^ち 地の審判者よ、^{しんぱんしゃ} 起ちて^た 驕慢の者に^{きょうまん} 報い給え。

あだをむくゆるかみよ、しゅあだをむくゆる
 仇 報 神 主 仇 報
 かみよ、おのれをあらわしたまえ。
 神 己 顯 給

誦經) ^{あだ} 仇を報ゆる神よ、^{かみ} 主、^{しゅ} 仇を報ゆる神よ、

おのれをあらわしたまえ。
 己 顯 給

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{そうせいき} 創世記の讀、^{よみ}

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、

【 創世記 17 章 1-9 節 】

誦經) ^{くじゅうくさい} 九十 ^{とき} 九歳の時、^{しゅ} 主は ^{あらわ} アヴラムに ^{これ} 現れて ^い 之に謂えり、^{われ} 我は ^{なんぢ} 爾の ^{かみ} 神なり、^{なんぢ} 爾

^{われ} 我の ^{よろこび} 悦を ^な 爲して、^{むてん} 無玷なれ、^{われ} 我が ^{やく} 約を ^{われ} 我と ^{なんぢ} 爾との ^{あいだ} 間に ^た 立てて、^{はなはだ} 甚 ^{なんぢ} 爾を ^ま 増さ

^ん ん。 ^{そのおもて} アヴラム其 ^{ふふく} 面に ^{かみ} 俯伏せり。 ^つ 神又 ^い 彼に ^{われ} 告げて ^{なんぢ} 曰えり、 ^た 我の ^{やく} 爾と ^み 立つる ^{やく} 約は、 ^み 視よ、

^{なんぢ} 爾は ^{おお} 衆くの ^{たみ} 民の ^{ちち} 父と ^な 爲らん、 ^{なんぢ} 爾の名は ^な 是より ^{これ} アヴラムと ^よ 呼ばれず、 ^{すなわち} 乃 ^{なんぢ} 爾の名は ^な アヴ

^ラ ラムと ^な 爲らん、 ^{けだし} 蓋 ^{われ} 我 ^{なんぢ} 爾を ^{おお} 衆くの ^{たみ} 民の ^{ちち} 父と ^な 爲せり、 ^{われ} 我 ^{はなはだ} 甚 ^{なんぢ} 爾を ^{ふや} 殖し、 ^{しよみん} 諸民

^{なんぢ} を ^{おこ} 爾より ^{しよおう} 起さん、 ^{なんぢ} 諸王は ^い 爾より ^{われ} 出でん、 ^{われ} 我が ^{やく} 約を ^{われ} 我と ^{なんぢ} 爾 ^{およ} 及び ^{なんぢ} 爾の ^{のち} 後の ^{よよ} 世の ^{しそん} 世の

^{しそん} 子孫との ^{あいだ} 間に ^た 立てて、 ^{えいえん} 永遠の ^{やく} 約と ^な 爲さん、 ^{すなわち} 即 ^{われ} 我は ^{なんぢ} 爾 ^{およ} 及び ^{なんぢ} 爾の ^{のち} 後の ^{しそん} 子孫の ^{かみ} 神と

^な 爲らん、 ^{われ} 我は ^{なんぢ} 爾 ^{およ} 及び ^{なんぢ} 爾の ^{のち} 後の ^{しそん} 子孫に ^こ 此の ^{なんぢ} 爾が ^{やど} 寓れる ^ち 地、 ^{すなわち} 即 ^{ぜんち} カナアンの ^{あた} 全地を ^あ 與

^{えて} えて、 ^{えいえん} 永遠の ^{ぎょう} 業と ^な 爲さん、 ^{しこう} 而して ^{われ} 我は ^{かれら} 彼等の ^{かみ} 神と ^な 爲らん。 ^{かみ} 神又 ^な アヴラアムに ^い 謂えり、

^{なんぢ} 爾 ^{およ} 及び ^{なんぢ} 爾の ^{のち} 後の ^{よよ} 世の ^{しそん} 子孫は ^わ 我が ^{やく} 約を ^{まも} 守るべし。

【 第二の提綱 ^{プロキメン} 】

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、

誦經) ^{だいし} プロキメン、 ^{しらべ} 第四の ^{あらた} 調、 ^{うた} 新なる ^{しゅ} 歌を ^{うた} 主に ^{うた} 歌え。

あらたなるうたをしゅにうたえ。
新 歌 主 歌

誦經) ^{しゅ} 主に ^{うた} 歌いて ^{そのな} 其名を ^{あが} 崇め ^ほ 讃めよ。

あらたなるうたをしゅにうたえ。
新 歌 主 歌

誦經) ^{あらた} 新なる ^{うた} 歌を

しゅにうたえ。
主 歌

【 祝福 】

司祭) 睿智、肅みて立て、ハリストスの光は衆人を照らす。

誦經) 箴言の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

【 箴言 15章20節—16章9節 】

誦經) 智慧ある子は父を悦ばせ、愚なる人は其母を藐す。愚なる者の徑は智慧乏し、

さときもの なお みち ゆ あいはか はかりごとやぶ はかるものおお はかりごとな
哲者は直き途を行く。相議ることあらざれば 謀破る、議者衆ければ 謀成る。

ひと そのくち こたえ よ よろこび え ことば いた とき かな いか よ ちしゃ
人は其口の答に由りて喜樂を得、言を出して時に適うは如何に善からずや。智者の

いのち みち うえ むか しも あ ちごく さ ため おごもの いえ しゅこれ こぼ やもめ
生命の道は上に向う、下に在る地獄を避けん爲なり。驕る者の家は主之を毀ち、寡婦

ちかい た あくしゃ はかりごと しゅ にく ところ いさぎよもの ことば そのよみ ところ
の地界を建てん。悪者の 謀は主の悪む所、潔き者の言は其嘉する所なり。

り むさぼもの そのいえ みだ まいなくもの い ぎしゃ ころ こた かんが
利を貪る者は其家を擾し、賄を悪む者は生きん。義者の心は答うべきことを考

え、不虔者の口は悪を吐く。義者の途は主の悦ぶ所なり、之に由りて敵も親友と爲

る。主は悪者より遠し、義者の祈を聽く。善を見る目は心を悦ばせ、嘉き音は骨

を潤す。生命の教誨を聽かんと欲する耳は智慧ある者の間に駐まる。誠命を棄つる者

は己の靈を藐じ、譴責を聽く者は聰明を得。主を畏るる寅畏は智慧を教う、謙卑

は尊榮に先だつ。心に謀るは人に在り、舌の答は主に屬す。人の途は其目の前に

悉く潔し、惟主は靈を量る。爾の作為を主に託せよ、然らば爾の謀る所成

らん。主は一切を己の爲に造れり、不虔者は悪しき日に滅びん。心の驕れる者は皆

主の悪む所なり、手に手を執ると 雖罰を免るるを得ず。善き途の始は義を行うに

在り、此れ神の悦ぶ所にして、祭を獻ぐるに勝れり。主を尋ぬる者は義と共に知識

を得、誠に彼を尋ぬる者は平安を得ん。矜恤と眞實とに因りて罪は潔めらる、主

を畏るる寅畏は悪より離れしむ。

司祭) 爾に平安、睿智、願わくは我が禱は香爐の香の如く爾が顔の前に登り、我

が手を擧ぐるは暮の祭の如く納れられん。

※ 願わくは我が禱は、、、へ